

ひょうご 水百景

No.22 揖保川（たつの市神岡町・新宮町）

～因幡街道・寝釈迦の渡しと髯崎の屏風岩～



写真-1 屏風岩頭頂部から揖保川とお釈迦様の寝姿を撮影（平成28年7月）

■ 屏風岩頭頂部からの眺め「最高！！」

揖保乃糸資料館「そうめんの里」から西に一般国道724号姫路新宮線を約1km走ると、揖保川に架かる髯崎（はしき）橋に出ます。そこからは歩きで、尾根に沿って山道を登ること約20分で国指定天然記念物「髯崎の屏風岩」の頭頂部に着きます。岩場のため樹木が少なく、見晴らしは最高です。上の写真はそこから撮影したもので、手前にJR姫新線、その直下流に小宅（おやけ）頭首工、さらに下流に髯崎橋が見えます。

そして、この橋の約100m下流に因幡街道「寝釈迦の渡し」跡があります。南西方向の山々を眺めると、お釈迦様が頭を南にして横たわっているように見えることからこう呼ばれています。頭に相当する山が鶏籠（けいろ）山、胴体が“新龍アルプス”で、これらの山々がちょっとメタボな“お釈迦様の寝姿”に見えます。

渡し跡には、道標を兼ねた石柱（写真-2）が建てられています。

東面（写真-3）に「寝釈迦のわたし」、南面に「左 たつの むろ つみち」、西面に「スグ上 いほがみさん 宿村」、北面（写真-2）に「右 千本 みまさかみち」と刻まれています。



写真-2 「寝釈迦の渡し」石柱（北面）



写真-3 「寝釈迦の渡し」石柱（東面）

江戸時代、街道筋には幕府・諸大名の御用人馬の継ぎ立て（宿駅で人馬を替えて、貨客を送り継ぐこと）を行うために宿駅が置かれていました。鶯崎宿もその一つですが、揖保川がある関係で川東と川西の両駅に分かれ、川東は鶯崎宿村、川西は鶯崎村を駅場とし、荷物継ぎ立ての分担は両駅で取り決めが交わされていました。

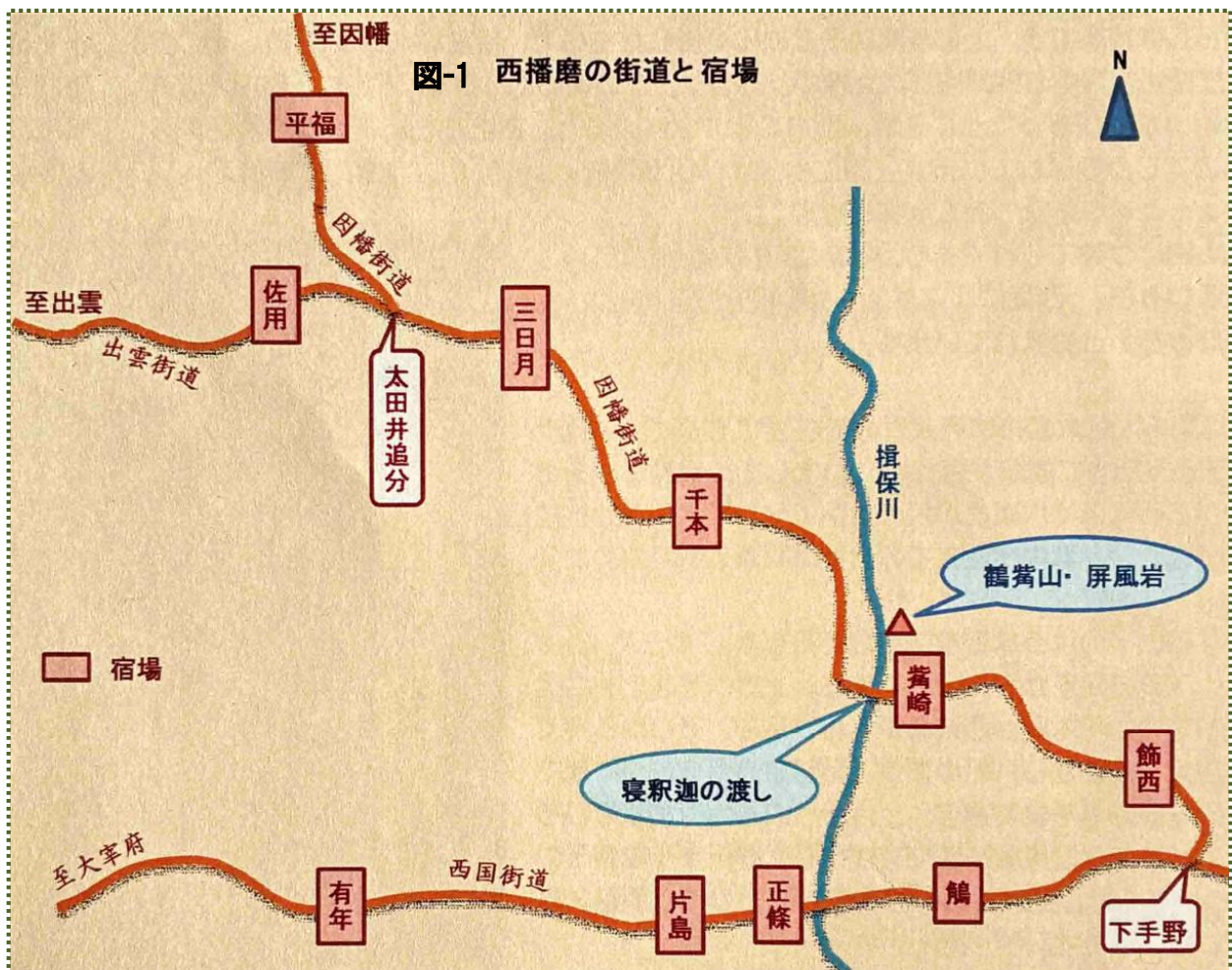
その中に高瀬舟に関する以下のような取り決めがあります。「間三度（あいさんど）飛脚の荷物は揖保川下流の網干から舟で上下する。上方へ運ぶために揖保川を高瀬舟で下す飛脚荷物は千本駅が西鶯崎駅へ付け込み、そこから舟で下す。ただ、五月の田植えの時期から八月の彼岸（新暦では9月20日頃）までの舟留めのときのみ西鶯崎駅が網干まで運ぶ。上方からの飛脚荷物すなわち網干から揖保川を登ってくる荷物は東鶯崎駅で陸揚げし、同駅が千本駅その他へ付け送る。」とあり、この渡し場は高瀬舟の船着き場としてだけでなく、陸路・舟路の中継機能も担っていたようです。

■ 因幡街道

因幡街道は江戸時代に整備された脇街道の一つで、播磨国姫路から因幡国鳥取に向かう街道です。姫路市の下手野で西国街道（山陽道ともいう）から分岐し、飾西（しきさい）宿（姫路市）、鶯崎宿（たつの市）、千本宿（たつの市）、三日月宿（佐用町）を経て太田井追分（佐用町）で分岐して北に向かい、平福宿（佐用町）を通過して因幡国へ入り、大原宿、坂根宿、駒帰（こまがえり）宿、智頭（ちず）宿、用瀬（もちがせ）宿、河原宿を経て鳥取に着きます。ルートは、概ね現在の国道29号、一般県道724号姫路新宮線、国道179号、国道373号に沿っています。

一方、太田井追分から西に向かう出雲街道は、佐用宿（佐用町）を通り、津山宿、新庄宿、米子宿などを経て出雲国松江に至る街道で、下手野から太田井追分までは因幡街道と重用区間となっています。

このように寝釈迦の渡しを通る街道は、因幡（いなば）や美作（みまさか）、伯耆（ほうき）、出雲に向かうことから、美作道、因美街道、因伯雲作往還（因幡・伯耆・出雲・美作から1文字ずつ取ったのかな）とも呼ばれています。



ところで、寝釈迦の渡し跡に建つ道標の足元に写真-4のような石の説明板が埋設されています。説明の中に「別名 駈落街道」と刻まれていて、江戸時代、駈け落ちの名所になっていたようです。残念ながら詳しい由来は定かではありませんが、ここで親不孝を寝釈迦に詫言いて川を渡り新生活を始めたのでは…。さて、どこへ落ちて行ったやら。

寝釈迦の渡し

川下の山並みが寝釈迦姿であるからの名。ここ、鶯崎は因幡街道別名駆落街道筋の宿場町で、の渡し場で旅人は道中の平安を祈り西に向かう。駆落者は身の不孝を詫びて共に釈迦の寝姿に手を合わせたという。また後醍醐天皇御西下の道筋でもあった。



写真-4 寝釈迦の渡しを説明する石板

■ **どっちが因幡街道 ⇒ どっちも因幡街道**

「ZENRIN」の地図では、宍粟市山崎を通る国道 29 号が「因幡街道」となっていて、佐用町平福を通る国道 373 号は「智頭街道」と表記されています。一つの道に複数の名称があったり、一つの路線名が複数の道に使われていたりして混乱します。もっとも、現在の道路行政下でも、道路が他路線と重複して供用される「重用区間」があり、一時的な取り扱いではありますが二つの路線が同一路線名として認定される「W 認定」というものもあります。

そこで、県立歴史博物館にメールで問い合わせると、学芸員の方から、江戸時代の交通は専門ではないが、と前置きしたうえで、「街道・道の名称というのは、元々行先や時期など、地域の事情を反映して流動的なものです。なお、平福から美作に入る智頭への街道、宍粟一宮から因幡に入る若桜(わかさ)への街道は、ともに因幡街道としての性格を有しますが、反対に因幡から播磨に向かう場合も因幡街道とされたかどうかは再考の余地があります。」との回答をいただきました。

確かに、姫路から鳥取に向かう因幡街道は、鶯崎宿の手前の追分で北に分岐し宍粟方面へ向かい戸倉峠を越える若桜往来ルートと、図- 1 のように平福宿を経由して志戸坂峠を越える智頭往来ルートの 2 ルートがあるようです。であれば、同じ街道名とせずに「若桜街道」、「智頭街道」とすれば混乱は生じないと思いますが……。

一方、鳥取から播磨に向かう道は「播州街道」と呼ばれていたとの資料もあります。要するに 1 路線 1 名称ではなく、どこへ向かう道か、で名称が決められていたようです。例えば、有馬温泉に向かう道は東から向かう道、西から向かう道もすべて「有馬道」あるいは「有馬街道」とか「湯の山街道」と呼ばれていたようです。あまりシビアに考えないほうがいいのかも…。

■ **鶯崎の屏風岩**

姫新線に乗って、佐用から姫路へ向かう時、播磨新宮駅を過ぎてしばらく行くと、左手に鶴鶯山(つるはしやま)の切り立った西側斜面に露出した岩脈が見えてきます。これが「鶯崎の屏風岩」です。

鶴鶯山全体はガラス質～流紋岩質多結晶溶結凝灰岩(白亜紀相生層群最上部の伊勢累層)で、全体的に変質が激しく、黄土色～帯褐色を呈し長石や石英の結晶片を含んでいます。

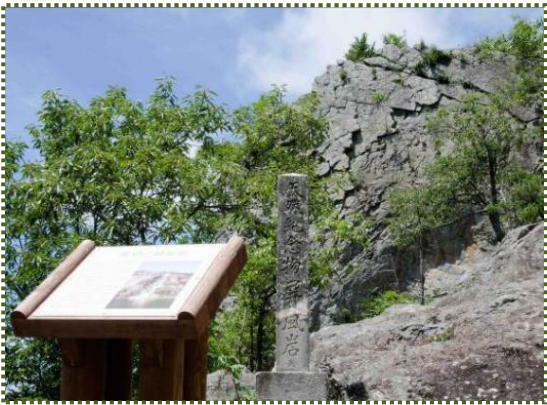


写真-5 屏風岩頭頂部の前に建てられた「天然記念物 屏風岩」の石柱(右)と説明板(左)



写真-6 写真-1 の撮影ポイントを地上から見ると…

「屏風岩」は、一部が樹林に覆われていますが、揖保川の河床から山頂まで、高さ5～12m、厚さ4～7m、全長120mあまりで、切り立った岩肌を露出させています。これは、岩盤の割れ目に沿って入り込んだマグマがそのまま冷え固まった石英安山岩の岩脈(dike)で、周囲の岩石よりも硬いため、この部分が風化・侵食から取り残され、屏風を立てたように地表に突き出ているのです。

鶴鷲山の尾根沿いに登って行くと、高さ10m以上の大岩がそそり立つ屏風岩の頭頂部に着きます。岩脈は、山頂の下でY字型に分岐し、右の支脈が山頂部に大きく露出しています。岩脈の一部には、細かく横に割れ目が入っていますが、これは貫入面に垂直に入った節理です。また、岩脈の中央部には縦にも大きな割れ目が入り、この割れ目に沿って木や草が生えています。

『播磨風土記』(奈良時代)には、屏風岩の立つこの鶴鷲山を「御橋山」として、次のように描かれています。

「大汝命(おこなむちのみこと)、俵を積みて橋を立てましき。山の石、橋に似たり。故(か)れ、御橋山と号(なづ)く。」

昔の人々は、露岩が階段状に山頂まで続いているさまを見て、神様が米俵を積み上げて天にあがる橋を架けようとされたと思ったのでしょうか。

「鷲崎屏風岩」は、明治27(1894)年地質学者の巨智部(こぢべ)博士^{※1}によって学会に発表され、昭和6(1931)年文部省から地質学上貴重な資料であるとして、「天然記念物」に指定されました(発表から指定まですいぶんと間が開いています)。



写真-7 屏風岩

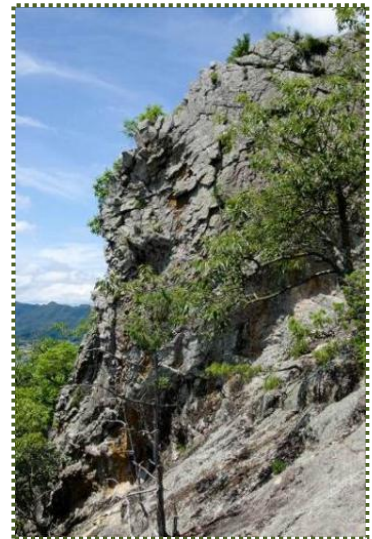


写真-8 屏風岩・頭頂部

※1 巨智部博士: 巨智部忠承(ただつね)は、明治から大正時代の地質学者。嘉永7(1854)年3月、長崎県に生まれる。東京大学卒業し、明治13(1880)年7月、同校理学部地質学教授となる。明治15(1882)年、農商務省地質調査所(中央省庁再編に伴い平成13年4月1日から独立行政法人産業技術総合研究所)の創設とともに技師となり、明治26(1893)年所長となる。応用地質学の草分けのひとり、地質図の作製、鉱床調査や油田開発などを手がける。明治38(1905)年統監府農商工部技監となった。昭和2(1927)年3月没。

■ こっちも見ようによっては「屏風岩」に見える

下の写真-9・10は、「屏風岩」から約300m北の山腹斜面の露岩です。学術的な価値は別として、こちらの方がよほど「屏風」らしく見えるのですが…。

ネットを見ていると、この岩を間違えて「屏風岩」としている記事が結構ありました。確かに間違えやすいし、実は筆者も長い間、これが「屏風岩」と思っていました。



写真-9 「屏風」のように見える岩



写真-10 「屏風」のように見える岩のアップ写真

■ 鶯崎の磨崖仏「いぼ神さん」と六地藏ならぬ「四地藏」

鶯崎山南尾根の先端部の岩壁に、“鶯崎の磨崖仏”があります。昔から「いぼ神さん」「いぼ取り地藏」として信仰されているこの磨崖仏は、舟形光背をもつ地藏立像で、地藏尊は蓮華座に脊(くつ)を履いて立ち、右手に錫杖(しゃくじょう)、左手に宝珠を持っています。舟形光背に向かって右側には大きな梵字があり、その下に「右志趣者相当藤原口口口廻之忌辰也藤原 文和三(1354)年十月廿四日……」の銘が刻まれていて(よく見えませんが)、紀年銘のある磨崖仏としては県下最古のものだそうです。昭和44(1969)年3月25日、県が重要文化財に指定しています。

また、この磨崖仏より上流約15mの岩壁にも4体の地藏立像が彫られています。ただ、一般的に「六地藏^{※2}」というのによく聞きますが、四地藏は…何か途中でやめざるを得ない事情ができたのでしょうか。

いずれの磨崖仏も周囲に穴が5~6ヶ所穿たれており、さしかけ屋根があったのではないかとされています。

そして、対岸の鶯崎橋の袂には右下の写真のような拝殿があります。橋が架かっていなかった時代、右岸側に住む人が地藏菩薩を拜むのに川を渡るリスクを回避するために拝殿を造ったのではないのでしょうか。ただ、ちょっと遠くて菩薩様がよく見えません。



写真-11 「いぼ神さん」

※2 六地藏：生前の行為の善悪如何によって、人は死後に地獄・畜生・餓鬼・修羅・人・天という六道の境涯を輪廻・転生するといわれる。そのそれぞれに衆生救済のために配される地藏菩薩の分身が、檀陀・宝印・宝珠・持地・除蓋障・日光の六地藏である。



写真-12 六地藏ならぬ四地藏



写真-13 拜殿

■ モノローグ

右の写真は、平成28(2016)年7月末に古宮天満神社の裏手の岩場から揖保川と姫新線を撮ったときに、偶々鶯崎橋の下で楽しそうに鮎狩り(鮎のつかみ取り)をしているのを見てシャッターを押したものです。

筆者も、上郡土木事務所や龍野土木事務所勤務の頃に千種川や揖保川で鮎狩りに参加したことを覚えています。

現地で食べた鮎の塩焼きの美味しかったことは今でも記憶に残っています。



写真-14 鶯崎橋の下での鮎狩り

【参考資料】

- 1 『龍野市史・第二巻』 龍野市 昭和56年3月
- 2 『ひょうご歴史の道～名所めぐり「美作道」』 県立歴史博物館 HP
https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/digital_museum/trip/road_mimasaka/
- 3 『兵庫の地質』 兵庫県土木地質図編纂委員会編 平成8年3月
- 4 『地質岩石を訪ねて～髯崎の屏風岩』 「兵庫の山々 山頂の岩石」(橋元正彦) HP 平成14年5月
<https://www2u.biglobe.ne.jp/~HASSHI/geoturufuji.htm>
- 5 『因幡街道、髯崎ノ屏風岩、巨智部忠承、六地藏、ヒトツバ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

ヒトツバの大群落

ヒトツバは、ウラボシ科ヒトツバ属に属し、単葉の葉をもつシダの一種。磨崖仏が刻まれた岩場周辺には、ヒトツバの大群落が見られる。日本では関東以西の本州から琉球列島に分布する。やや乾燥した森林内に多く、岩の上や樹木の幹に着生する。特にウバメガシ林では林床に密生することがある。着生植物として栽培鑑賞するにはやや大柄すぎるのか、あまり利用されない。



ヒトツバ

※発行：平成25(2013)年3月 『ひょうご水百景』 No.22
改訂：令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』 No.22